２０１２年３月号・季刊 34 号

ミンダナオの風

執筆編集＊松居友　　発行：ミンダナオ子ども図書館

来年ミンダナオ子ども図書館は
開設１０周年を迎える。
順風満帆ですべてが進んで
来たわけでは決してない。
雲間から垣間見える
北極星のかすかな光を頼りに
嵐の中を、
時には試練をかいくぐり
ここまでたどり着いた。
痛んだ部分も多々あり
１０周年を前に修復を施し
新たな船出への準備をしている。
日本の津波で打撃を受けた
支援者の方々も多く
スカラシップ支援者も激減した。
それでも力を合わせて
ミンダナオの洪水対策支援を
若者たちと開始する。
すべてを失っても
互いに助け合って生きている
こちらの人々の力強さに
逆に激励されながら、
水牛のように
ヒナイヒナイ　バスタカヌナイ
ゆっくりゆっくり
でも力強く絶えることなく
未来に向かって歩いて行こう
日本の子どもや若者たちと
心を通わせあいながら。

Mindano Children's Libary Foundation, Inc.
MCL
SEC REG.NO.CN200315083

心の自立支援と経済的自立支援

ミンダナオの子どもや若者たちは、日本の子どもや若者たちの心の自立支援ができる。元気な若者も未来への希望を得るけれど、心に孤独や傷をおって訪ねた子どもや大人たちが、見事に心を回復し、生きる力を受け取って帰って行く姿は感動的だ。

逆に日本の人々は、経済的な自立支援に協力できる。本来、こんなにも貧しくなる必要がなかったミンダナオの素朴な人々が、貧困の中に投げこまれた理由の一つに、自国の利権のみを優先した先進国による自由資本主義的な開発がある。経済支援は、事業を立ち上げるのと同様で、一筋縄ではいかないけれど、MCLでも、マノボ地域の経済自立に向けたゴムの木の植林プランを始める。苗木を育てたり、植林するのは地元の人と奨学生たち。下流のイスラム地域の洪水対策も兼ねている。

自分たちの村の民話を収集し絵本や民話集を作る出版プロジェクトや、映像制作プロジェクトも着々と進んでいる。

来年は、ミンダナオ子ども図書館設立10周年だ。民希さんや陽などの次世代のスタッフも加わり、MCLの新たな時代が生まれるだろう。

日本の子どもたちとミンダナオの子どもたち

ミンダナオに足を踏み込んだのが、1998年の事だから、かれこれ15年近く、ミンダナオに関わっていることになる。ミンダナオ子ども図書館が法人資格をとったのは2003年。来年が10周年だ。

拙著『サンパギータの白い花』（女子パウロ会）にも書いたが、足を踏み込んだのはまったくの偶然で、精神的に落ち込んだことが理由。2000年を境に大きな転換期が来る、大変なことが起こる、という予感に取り憑かれていた。

911が　起こったときに、始まったな！と思った。ミンダナオでは、この前後からすでに戦闘が開始され（ミンダナオは、アジア地域でのキリスト教徒とイスラム教徒の聖戦における最前線？）、2001年にイスラム地域で膨大な難民の群れを見て、ミンダナオ子ども図書館を発足させる決心をしたことは、今年の『カトリック生活・一月号』（ドンボスコ社）に記事を書いた。

石油や鉱山資源、プランテーションなど、海外資本にとってはヨダレが出るような豊かな資源に満ちたミンダナオ。植民地時代から現代にいたるまで、それら資源を搾取し続け、自国の経済発展に利用してきた先進諸国。その結果、今も現地で新たに生まれ続けている格差と貧困。

「貧困問題は国内問題で、怠惰な国民性によるものだ。フィリピン人も日本人のように勤勉であるべきだ、そうすれば国は発展する・・・」等、まったく小学生のような知識しかなかった自分が今は恥ずかしい。貧しい国をあえて貧しいままにしておく方が、搾取する側には好都合で、実に巧妙なシステムがすでに作られている、等と言う

日々の活動を、豊富な写真で、月に2回から3回の割合で更新報告しているMCLのサイト

ウエッブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です！

ことは考えもしなかったのだから。

ミンダナオの子どもたちは、貧困苦ゆえに家庭が崩壊したり、学校にも行けず、医療も全く受けられず、サトウキビ刈りなどの労働に狩りだされ、時には少年兵にもなっていくのだが、そんなミンダナオの子どもたちが、ぼくの心を癒してくれた。

ミンダナオには人の心を癒す力がある。すべてにあるとは言わない。こちらではビレッジと言われる高い塀とガードマンで固められた小金持ちの村に住みたいとは決して思わないが、貧しい人々、とりわけ山や海辺の子どもたちは純粋で本当に可愛らしいし、町の貧民街やストリートチルドレンもたくましくて大好きだ。

ミンダナオ子ども図書館を始めて6年間ほどは、日本人に会うことは全くなかった。

現地で日本語を使うことも、日本食を食べることも、日本人の同僚もなく、現地の若者たちを車に乗せて自らハンドルを握って、ジャングルを抜けて反政府組織の跋扈する山岳地域の先住民を訪ねながら、日本人である自分が、なぜこんなところにいるのだろう？と、しばしふっと我に返ったような奇妙な気持ちになったものだ。

それでもミンダナオに強く引かれたのは、自分の子ども時代の原風景を、ここに見るように感じたことがひとつの大きな理由だろう。本当に様々な問題を抱えている島なのだけれど、なぜか自分の故郷にいるような気持ちにさせられる。

これは、ぼくだけの感覚ではなく、この地を訪れてこられた、若者から退職を迎えた中高年までが共通して感じる気持ちらしい。特に、僻地の極貧の子たちを集めたミンダナオ子ども図書館の雰囲気そのものが、何とも人間的で暖かいという。

孤独な若者や中高年がここで癒され、生きる力を得られる事実は、日本に戻ったあとも、「想い出を心の支えとして生きています」「いつでも思ったときに行けるのが、人生の支え」といった、訪問者からの便りが証明している。

ヤシの木にのぼって、子どもたちが実をとり、その場で殻を鉈で割り、美味しそうに汁を飲む姿。大勢の子どもたちが集まって、花いちもんめやかごめかごめに似た遊びを、夕暮れ時までしている様子。たとえ貧しくても、生きていることの実感や喜びが、その笑顔から感じられる。

日本にも、いたるところで見られた日常のそんなたわいもない風景が、ちまたから消えたときから、日本人の孤独と心の病が始まった？

ヤシの木はなくても、柿の木に登る子どもはいたし、金はなくても人情はあった。昔は日本も、こんな感じだったのに、とよく思うことがあるのは、年をとった証拠だろうか。

ぼくは東京の杉並、天沼の稲荷横丁に生まれ少年時代を過ごしたのだけれども、商店街には銭湯もあり、原っぱと畑と雑木林があり、小川ではメダカやザリガニを追いかけ、神社の境内にあるザクロや庭のイチジクの木に登っては美味しい実を食べた。

家々を囲む壁は、ブロックではなく生垣だったから、小学生のぼくは、とりわけ小柄だったこともあり、生垣をすり抜けて近道をし学校に通った。

まだ世界はミンダナオ的で、ちまたに「生活の活気」があり、「人情の温かい香り」がプンプンと満ちていた。

荻窪駅の前は市場だったので、裸電球のしたで、魚屋が威勢よく「ラーーーシャイ、ラッシャイ、ラッシャイイー。美味しいよ、安いよ！」などと叫んでいた。井の頭線は田んぼの中を抜けて

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願いします。

走るのどかな田園電車だったし、線路の脇の傾斜地でツクシをとって家に持ち帰り袴をむいて母にわたすと、おいしく料理してくれた。

小説で言えば井伏鱒二のような世界だが、ミンダナオのキダパワンのような田舎町に来ると、そのような風景がいたるところに広がり、ホッとするような懐かしさを感じる。

家から帰ると、もちろん塾へ行ったりはしない。ランドセルを放り投げるとあっという間に外に遊びにでかけ、夕暮れまで徒党を組んで悪さもしながら思う存分遊んだものだ。

あの外遊びと自然環境、友人たちとの出会いがあったからこそ、日本人まったく一人ミンダナオで現地の若者たちと何の不自由もなく生活し、子ども時代に培った仲間との遊び気分で、気負いもなく彼らとNGOを立ち上げていくような今の自分があると思う。

そこにさらにもう一つ加えるとするならば、父が絵本を読んでくれた体験だろう。

ミンダナオの貧しい多くの地域には絵本がないので、絵本の読み聞かせという時間はないが、読み聞かせの原点ともいえる、語りの世界が生きていて、その意味では、ぼくが子どもだった頃以上に、ミンダナオでは心の文化が生きている。

心の文化とは何かというと、要するに、『外で思う存分遊んで、帰ったら親や祖父母からお話を聞いて寝る』という、子ども時代の人間形成の基礎的環境が、とりわけ貧しい先住民族の人々の中に濃厚に息づいているといえるだろう。

昔話の語り聞かせが、自立し生きる力になるという事は、拙著『昔話と心の自立』（宝島社）で書いたが、ここの子どもたちがまさにそれを証明してくれている。

日本の子どもや若者たちが、ここの子どもや若者たちと出会って、自立し生きる力を得て帰るのは、少しも不思議な奇跡ではなく、自分のうちにありながらも、意識させられることもなく抑圧され眠っていた、人間としての本性が覚醒し、自意識となって目覚めるが故だろう。

ミンダナオ子ども図書館を始めた頃は、読み聞かせの経験も、絵本体験もない地元の子どもたちのことを、哀れに思ったりもしたものだが、この地の子どもたちのお話を語る能力と、昔話が「昔」になっていない状況を見るにつけて、絵本の読み聞かせに執着していた「先進国から来た自分」の傲慢さに辟易し始めた。

こちらでは絵本は、ほとんどが英語かタガログ語での出版だし、本を買えるのは金持ちの家族だけ。貧しい地域でそれを得意げに見せびらかすのは、オリジナルな言語を無視した文化侵略のように思えてきたのだ。

「子ども図書館」といえば日本では聞こえが良いが、山の貧しい子たちに町まで来るお金があるわけもなく、出版そのものが、経済的に裕福な国だから行えることで、真に貧しい国で、これ見よがしに外国作品を集めて子ども

日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているMCLのサイト
ウエッブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です！

図書館を作っても、どれだけ意味があることなのかと思い始めた。

自ら始めた子ども図書館活動に失望し、絵本が馬鹿馬鹿しくなった時期だ。

そうした疑問の中で、せめてもの対策として、読み聞かせは絵本をそのまま「読む」のではなく、現地の子どもたちや若者たちの、現地語による自由な再話に変え、さらに現地の民話の素話や語りを重視し、子どもたちと楽しむ歌や踊りも、現地の歌を交えて行うようにした。寸劇も始めた。

そうしていくと、逆に外国から来た絵本の多くが、いかにも実態の薄い泡のようなものに見えてきて（先進国の

文化と同様に）テレビとゲームとパソコンに囲まれて日々を過ごしている日本の子どもたちが、しだいに哀れに見えはじめた。

そんなこんなで、ここ数年は絵本や本に興味がわかなくなっていたのだが（もう10年以上、絵本も本も書いていない）、こちらの若者たちが将来広い視野を持って世界の諸問題をとらえ、ミンダナオの貧困や戦闘の問題に取り組んでいくためには、読書力や基本的な知識を身につける事も大切で、その意味では学校教育も多少の役には立つわけだし、語学力を身につけて本を読んだり、世界の文化に触れることも大切なので、別の意味で幼い頃に絵本に触れることも重要なことだと今は思っている。

ミンダナオ子ども図書館は、来年10周年を迎える。

10周年は、一つの節目でもあり、新たな出発のための折り返し地点でもある。

急速に成長してきたがゆえのほころびも見えてきたので、今年は、根底から体制を見直し、新たな出発を用意する時期だと思っている。

陽や民希さんといった若い世代も加わったし、これを契機に、日本の子どもたちや世界の若者のために、出版や映像を通してミンダナオから世界に向けて文化を発信する企画を準備している。

今までは、ミンダナオの子どもたちの事ばかり考えてきたが、今後はミンダナオから世界に再び目を向けて、文化を発信する事によって、日本や先進国に住んでいる、心が後退したかわいそうな子どもたちのために、出来ることをしたいと思っている。

スタジオも出来る見通しがたったし（感謝しています）また若者たちが加わって、現地の昔話を絵本や本にして出版する企画も進行中だ。そこから新たな作家や芸術家、編集者が育っていけば、支援に頼るばかりではなく、さらに自力で仕事を生み出す事が出来るだろう。

そう考えると、ミンダナオ子ども図書館は、始まったばかりだ。

今我が家にいっしょに住んで生活している我が子のような86名の子どもたち。一番小さな小学一年生が大学まで出るには、まだ20年は現役でいなければならない。

来年はミンダナオ子ども図書館設立10周年、ぼくは60歳、還暦の一歩手前だが、年をとる暇もなさそうだ。

電話番号：080－4423－2998（日本から現地直通）
09219603640(現地携帯）
FAX 専用：(001)010-63-64288-5426(現地）
メール：mclstaff@zar.att.ne.jp(松居友）

あいさつにかえて　大野民希

～3月のミンダナオから～

２０１２年２月２２日水曜日、定刻約３０分遅れの午後６時過ぎ、ついにダバオ空港に到着した。ドリアンの匂いがふっとする。約５か月ぶりのミンダナオは冬の日本の寒さに凍えていた私を、変わらず、あつく迎えてくれた。

ちょうど一年前、恩人と言える方々の行動力がもたらした、なんとも幸運な巡りあわせによってＭＣＬに辿り着いた私は、まさか自分が一年後にスタッフとして、ここに来ることになるとは思ってもいなかった。日本で「しなければならない」諸々のことに、少し疲れてしまっていた日々の中で、一年前のＭＣＬでの１０日間は幸せのぎゅっと詰まったもので、思えば私の人生を、物理的にも精神的にも大きく変えてくれることになった。

私のこれまでのＭＣＬ歴は、昨年２月のビジターとしての１０日間と、８～９月の１か月半のインターンシップの計２回の滞在である。そしてそれぞれ短い間ながらも、実に様々なものを見聞きした。ミンダナオは私の浅い人生経験から言うのもなんだが、本当におもしろい興味深いところだと思う。多様なものが混在しているからこそ、寛容さ、曖昧さがあって、共存があり、そして衝突もあり、不正義としか言えないこともある。

穏やかな風と夕刻の激しい雨、雄大な雲と力強い日射し、荒々しい原生林の滝と真っ青な空の下果てしなく広がる湿原。村々にあるかわいいパステルカラーのモスクと壮麗な町の教会、見渡す限り続く非有機的なプランテーションのバナナ畑と山肌にパッチワークのように残る本来の表情豊かな森、ダバオのきらびやかなショッピングモールと山奥深くのちいさな村で食べる蛙のおいしさ。

今の世界での本流を成している高緯度地域のキリスト教文化、そしてそこに乗っかっている先進国日本では見えないものが、この島にはある。

よく聞き、よくよく見ること
よく考え、よくよく感じること

まだこの世の理が解らない私にできる唯一精一杯のことを、私の大切な子どもたち、大人たちのいるこの地でやっていこうと思う。

到着の翌日、子どもたちが恒例の歓迎会Welcome Partyを開いてくれた。一年前ＭＣＬとの初めての出会いの場であったこのWelcome Partyで、私は自分でもびっくりするくらい泣いてしまった。日本では壁にぶつかってばかりのダメダメな、こんな私を受け入れ歓迎し、何も求めない愛と喜びを示してくれる子どもたちに心がとけていったのだった。一年経ち同じ場所で私は、私の心の全てで愛するこの子たちといつも共にいることを自分に課し、そしてそれを強く喜びに思う。今回のWelcome Partyも変わらずとても元気で、愛のあふれるものだった。

この機会に僭越ながら、日本とミンダナオとを越境体験した今だからこそ私が言えることを、少しだけ書かせてもらいたい。日本のすべての人々、中でもまだ道に迷っている若い人々に、私の経験から感じたことをちょっとでも共有してもらえたらと思う。

どうか、世界はたった一つだなんて思いつめないで欲しい。あなたのいる世界の外にも、限りなく世界は広がっている。今いる世界であなたがたとえ苦しんでいたとしても、世界は決してそこだけではない。自分を縛って苦しまないで欲しい。

どうか自分が愛されていること、そして何よりも誰かを愛していることを忘れないで欲しい。もしかしたら日本では愛を感じにくいのかもしれない。でも、誰かを大切だと思う心、誰かを思うと温かくなる心、それが「愛」という、どこか大仰な印象の言葉でくくられるものだと思う。ただ今あなたが思い浮かべることのできたその顔、それが誰かを「愛している」ということなのだと思う。

どうかミンダナオや世界で起こることを、遠い世界の一ニュースとしてあなたの中で流してしまわないで欲しい。ここにはあなたと同じにリアルに、笑い、泣き、喜び、怒り、生きている輝く眼をした同じ人間がいる。

たとえニュースで流れる映像が、あなたの生活や見た目と全く違うものでも、私たちは同じく豊かに心をふるわせる人間なのだから。そして何よりその豊かな外の世界を知ることを、躊躇わないで欲しい。

肩肘張らないで、篤い使命に燃えなくても、あなたの周りにいる人を大切に思うように、どうかただ心を寄せて欲しいと思う。あなたの周りにいる人たちが素敵であるように、ここにいる子どもたちも本当にほんっとうにステキだから。

そしてその子どもたちの魅力ある日常を知るためにもぜひ一度ＭＣＬにお越しください！

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
自由寄付で結構です。よろしくお願いします。

無題

松居陽

想像がつくわけないじゃないか、君の気持ちなんて。こんな異質な世界に生まれ、作り作られてきたんだ。僕に、何が分かろう。君は、永遠の謎。そんな君だから、恋に落ちた。だって、その謎が目の前に生きている。
僕に、何が出来よう。独りよがりの価値観から君の進むべき道を決め付けて、恥をかくのは目に見えている。君すぎる君に、僕の入り込む隙なんてない。
あるようにあり、なるようになれ。君さえ、その行方を知ることはないだろう。でも、道は確かに開かれる。僕に出来ることといえば、その無類の美に見惚れるくらいだ。

ミンダナオの子供たちの体験談は、簡単に事実として受け入れられるものではない。まして、それを笑顔でさりげなく語るのだ。これが日本ドラマの設定なら、もっと大げさに打ち明かされるだろう。
銃撃を切り抜け、道端で避難生活を送った。親戚にだまされ、外国へ売り飛ばされそうになった。選挙争いで親を殺され、復讐心に病んだ。

のどが詰まる。唇が開く。でも、なんと言っていいものか。ため息混じりに笑い、首を振る。
話には聞いたことがある。遠い国の、遠い現実に、そんな経験に生きる子供たちがいるんだって。今、目の前で笑っている君が、その子なんだね。

誤解しないで。かわいそうだなんて思っちゃいない。ただ、君から目を離せない。
出会いに言葉が見つからない。
比べっこしたってしょうがない。こんなに違う僕たちだけど、こうして空気を分かち合っている。いつか一緒に、もと来た場所へ・・・

現実のずれに、呆れさせられる日々。街を歩けば、資本主義の疫病が目に映る。スラム街に高々と掲げられたビルボード。巨大モールの前で、紙コップを手にうつ伏せるストリートチャイルド。高級カフェには、コーヒー一杯分の日給で家族を支えるウェイトレスと、デザートと夫の文句で暇をつぶす貴婦人たち。
劣等感と優越感、心身をむしばむのはどちらだろう。たぶん、なんら違いはないんだ。

現代社会は、分裂症のなれの果てか。不釣合いなからくりだ。行き詰るごとに調整され、新たな部品が取り付けられる。根本から作り直さないで、いつまで走るかな。
平等という当然の道理を望めばこそ、うんざりさせられる。追求するほど迷い込み、関与するほどもてあそばれる。でも、一歩下がって眺めれば、そんな迷宮でさえ一枚の絵に納まる。

何もかもが嫌になれば、いっせいにはためく洗濯物に見とれよう。空を体現した水牛のまなざしに見とれよう。泣きたいときに泣き、笑いたいときに笑う子供たちの姿に見とれよう。
見とれていたら、見つかっちゃった。ほら、みんなが駆けてくる。わいわいがやがや、手をとられ、あっという間に仲間入り。彼らは、第三者でいることを許さない。臆病者の僕に容赦ない。人の気なんて、知ったこっちゃない。不法侵入、やりたい放題。そうやって、いつも無理やり思い出させてくれる。僕たちは、ひとつ・・・

それは、人が一番恐れながら、一番求めていることなのかもしれない。自己と周囲の一体性は、個人主義におぼれた僕たちにとって、ある種の死を意味する。架空の輪郭線が演じる僕と世界のシルエットは、お構いなしに飛び込んでくる子供たちの前に幻滅する。完全な自由とは、孤立することではなく、どうしようもなく繋がった宇宙に身を任すこと、完全な不自由を受け入れることなのだろうか。

ああ、引いたり押したりにはいい加減飽きた。自然に生きよう、人間らしく。今日も、お天道様が昇り、子供たちが目を覚ます。やしの葉は日光と戯れ、野良犬は日向で寝返りを打つ。住み慣れた地球の、ありふれた面影。

待ちに待っても現れず、探し回れば身を隠し、創れば見る間に色あせる。
そのくせ、ふと立ち止まると見つめてる。
そっぽを向けば頬に触れ、捨てればいっそうつけまとい、壊せばその分のしかかる。
そのくせ、あきらめたとたんすやすや眠る。
そんなことの、繰り返し。
恋い慕うほど手は届かず、じたばたするほど逃げ出せない。
生きるって、いたずら好きの妖精と遊んでるみたい。
君には、絶対かなわない。

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
一日三食たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき
病気になっても病院に行けないとき・・・

ミンダナオ子ども図書館支援方法

１、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付（購読料のつもりで気軽に）

直接下記の振替口座にお願いします。年四回、３月、５月、７月、１０月に
季刊誌「ミンダナオの風」１２月にはクリスマスカードをお送りしています。

２，大学生高校生スカラシップ支援の方へ・・年額６００００円（月額５０００円）

振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」と書いて、一部振り込んでいただければ、
年四回の季刊誌に同封して、本人からの手紙、３月スナップ写真、５月に成績表
７月にプロフィール、１０月は機関誌のみ、１２月にクリスマスカードなどが届きます。
新規奨学生の紹介は、３月５月の機関誌に同封して、プロフィールと写真をお届けします。
文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。

３，里親支援（小学生）・・・年額３００００円（月額２５００円）

振り込み用紙の通信欄に「里親」と書いて、一部振り込んでいただければ、年四回
季刊誌に同封して、３月にスナップ写真、５月は機関誌のみ、７月にプロフィール、
１０月は機関誌のみ、１２月にクリスマスカードが届きます。
新規里親の紹介は、３月５月の機関誌に同封して、プロフィールと写真をお届けします。
文通やプレゼントも可能ですが、隔月の学用品と一緒に僻地に届けて返事をもらうため
返事は機関誌に同封する形で半年ほど後になる可能性があります。
訪問の際は、自宅にご案内します。

４、保育所建設支援・・・３０万円（一括振込みでお願いします）

振り込み用紙の通信欄に「保育所建設」と書いて振り込んでいただければ、年四回
季刊誌と１０月には毎年現地の保育所の写真報告をお届け。開所式参加や訪問も可能です。

５、古着等の物資支援：郵送およびフィリピン宅配フォーレックスが便利です。

詳しくはウエッブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

スカラシップ・里親に関する質問、または現地訪問その他に関する問合せは、
電話・FAXかメールで現地にご連絡いただければ幸いです。
日本事務局は、完全ボランティアのためFAXのみ受け付けています。

電話番号：080－4423－2998（日本から現地直通・松居友）
09219603640(現地携帯・松居友)
FAX 専用：(001)010-63-64288-5426(現地 / 松居友)
日本事務局；Fax 専用　093－ 473 － 7710（内容は本部に転送されます）
現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City Cotabato 9400 Philippines